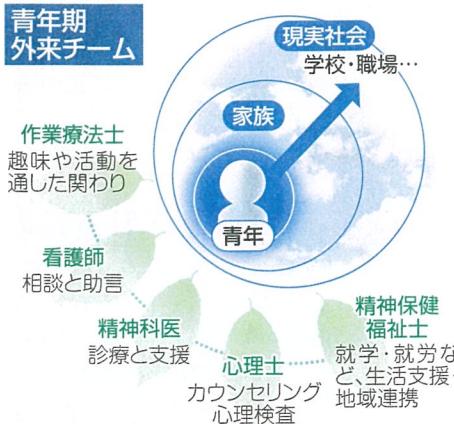


# スペシャリスト



青年期外来のカンファレンスではさまざまな職種のメンバーが自由に意見を出し合い、青木省三医師（右端）と共に関わり方の方針を決める

青年期  
外來手一八



青春期外来

# 慈圭病院 青木 省三 精神医学研究所所長

生き「らき」を抱える彼らの多くは、人が怖がったり、話をするとが難しかったり。「妙薬」があるわけではない。ゲーム・テレビ番組、ネット動画など何でもいい。青木医師は診察室でじっくり時間とかけ、言葉のキヤッヂボールを交わすきっかけを探る。

「教えてもららう」姿勢で聞き役になる。「ゲームをしていて知らないうちに街に出ていた」と話してくれた子に「どんなゲーム? どうやるの?」と尋ね、話を膨らませていく。外者からは雑談で見えても「楽しいことが増えていくことが、元気になるためにすごく大事」なのだと言う。

1980年代、岡山大学病院精神科神経科に勤務していた頃に、「思春期外来」の看板を掲げた。それまでの精神科医療は統合失調症やうつ病といったきちんと診断がつく患者を主に診ていたのにに対し、青木医師はさまざまな症状や状態で困っている若い人たちに開

わっていくことが必要だと考えてゐた。

同大助教授、川崎医科大学教授を経て、駆け出し時代に修業した慈生病院に戻ってきた。大学病院でやり残した仕事を仕上げたいと、いう思いで、今年5月から「青年定期外来」チームを率いている。

自指するのは、「診察室を外に開いていく」こと。診察室まで来られず、家で悶々としている人、時間がたつほど追い込まれ、外に出られないなくなる人にどうやつて手を使はし伸べるか。そのため、神科医だけでなく作業療法士、看護師、心理士、精神保健福祉士ら多職種でつくるチームの力を発揮する。精神科専門のスタッフがそろう慈生病院でこそできる体制だ。

毎週20人余りのチームメンバーが集まるカンファレンスで、1人ずつ担当する青少年の状況を報告

する。音楽が好きだと分かれば院内にある樂器を使って何かできな  
いかな?」と声が上がる。職種の  
垣根を越えてアイデアを出し合う  
試みが始まっている。

義務教育期間は、学校に行けなく  
ても教師や同級生と接触する機  
会が少しある。だが卒業年代に  
なり、進学も就職もしなければ  
家族以外との関わりはほとんどな  
くなってしまう。「そうした人たち  
のため、私たちが一步踏み出し  
地域に出て行きたい。少しずつ手  
探りでアプローチしている」と青  
木医師は言う。

原点には自身の青少年時代があ  
る。広島で育った義務教育、高校  
の頃はずっと「教室の中に入いるの  
がしんどい」と感じ、「家にこもる」  
ようになってしまふ不思議でなかっ  
た」と回想する。けれども、折々  
に助けてくれる教師や友人が現  
れ道が開けていった。

だから、孤立感にさいなまれる  
者たちの心を救うために、心を救う院

A man in a white lab coat and tie, likely a doctor or professor, sits at a desk and gestures with his hands while speaking. He appears to be leading a group discussion.

わっていくことが必要だと考えていました。

同大助教授、川崎医科大学教授を経て、駆け出し時代に修業した慈生病院に戻ってきた。大学病院でやり残した仕事を仕上げたいという思いで、今年5月から「青年期外来」チームを率いている。

自指するのは「診察室を外に開いていく」こと。診察室まで来られず、家で悶々としている人、時間がたつほど追い込まれ、外に出られなくなる人にどうやって手を差し伸べるか。そのため精神科医だけでなく作業療法士、看護師、心理士、精神保健福祉士ら多職種でつくるチームの力を発揮する。精神科専門のスタッフがそろう慈生病院でこそできる体制だ。

毎週20人余りのチームメンバーが集まるカンファレンスで、1人ずつ担当する青少年の状況を報告。な職種のメンバーが自由に意見を出し合い、針を決める

音楽が好きだと分かれば院内にある樂器を使って何かできな  
いかな?」と声が上がる。職種の  
垣根を越えてアイデアを出し合う  
試みが始まっている。

義務教育期間は、学校に行けな  
くても教師や同級生と接触する機  
会が少しある。だが卒業年代に  
なり、進学も就職もしなければ、  
家族以外との関わりはほとんどな  
くなってしまう。「そうした人たち  
のため、私たちが一步踏み出し、  
地域に出て行きたい。少しずつ手  
探りでアプローチしている」と青  
木医師は言う。

原点には自身の青少年時代があ  
る。広島で育った義務教育、高校  
の頃はすっと「教室の中にあるの  
がしんどい」と感じ、「家にこもつ  
ようになってしまふと思議でなかつ  
た」と回想する。けれども、折々  
に助けてくれる教師や友人が現  
れ、道が開けていった。

だから、孤独感にさいなまれる  
青少年はひどことではない。「か  
つて自分が助けられたように、彼  
らに対してもできることがあるので  
はないか。何とかして彼らを人と  
つなぎ、希望の灯りをともしてあ  
げたい」

眼鏡の奥から見守るまなざしは  
どこまでも優しい。

(文・池本正人、写真・植木肇)

自分はいかに生きるべきか、白  
分は何をしたいのか。思春期から青年期にかけ、誰しも思ひ悩み  
漠とした不安に駆られる。多くの人はいつの間にか葛藤の時をくぐり抜け、自立への階段を上っていく。  
だが、堂々巡りで考え続け、泥  
からはい上がりがれなくなる人もいる。学校に行けなくなれば「不登校」、部屋に閉じこもってしまうと「ひきこもり」。慈生病院（岡  
山市南区浦安本町）で精神医学研究  
究所所長を務める青木省三医師は  
40年間、そうした青少年と向き合  
い続けている。

A black and white portrait of Toshiyuki Ueda, a middle-aged man with dark hair and glasses, smiling at the camera.

## 診察室を外に開こう

あおき・しょうぞう 広島大学附属高校、岡山大学医学部卒。慈生病院、岡山大学病院精神科神经科助教授、川崎医科大学精神科教授を経て、今年4月から慈生会精神医学研究所所長。川崎医科大学名誉教授。英国ペスレム王立病院青年期ユニットなどに留学。専門は青年期精神医学と精神療法。「ぼくらの中の発達障害」(ちくまプリマ―新書)など著書多数。